

行政視察報告書

参加議員	山田 千里
調査期間	令和 8 年 7 月 24 日（金）～令和 8 年 7 月 25 日（土）
調査先 及び 調査事項	岐阜県岐阜市 岐阜市立草潤中学校について

視 察 概 要	
■ 調査先	岐阜市
■ 調査事項	岐阜市立草潤中学校について
■ 調査内容	○調査期日 令和 8 年 7 月 24 日（金） ○調査目的 本市では実施していない、不登校児童・生徒の居場所の一つである学びの多様化学校の開校 6 年目の現況、理念、教育課程、校風等が、全国的に増加する不登校児童・生徒支援にどのような効果をもたらしているか、また、本市の不登校支援と比較し、今後の支援に活かす実践例等を学ぶため。 ○調査先対応者 岐阜市立草潤中学校校長：石樽千恵 岐阜市立草潤中学校教頭：若原康司・割石裕美子 岐阜市教育委員会学校安全支援課生徒指導係長：青木崇 ○調査先の説明内容 ◆草潤中学校の概要と教育方針 - 学校の紹介：岐阜市教育大綱の基本方針のもと設置された中学校 ※岐阜市教育大綱〈基本方針〉 R 2. 12. 24 改定 - 学校・家庭・地域の誰もが生命の尊厳を理解し、互いに心を開く対話を重ね、一人ひとりが価値ある大切な存在として互いに認め合う教育を推進する ※草潤中学校（令和 3 年 4 月開校）岐阜市立の学びの多様化学校 - 特別の教育課程 - 選択可能なカリキュラム - ハイブリッド授業 - 規則のない自由な校風

- 経営理念：赴任2年目の校長が、直近のガイドの裏面にある「心身ともに健康で充実した幸せな未来を目指し、自分の持ち味を大切に育み、自分の良さや可能性を発揮できる学校の創造」を経営理念としている。
- 教育目標：「ありのままの自分ではない、安心していられる環境の中で、心身の安定を整え、自己選択により自分らしく学んで新しい自分を見つけて歩む姿」を目指し、教育活動を進めている。

◆開校6年目を迎える今

心身ともに健康で充実したしあわせな未来を目指し、自分の持ち味を大切に育て、自分のよさや発揮できる学校

◆草潤中学校の基盤

「柔軟な制度」、「多様性を踏まえた包摂性を持つ空間」、「対話のある文化」

◆子どもたちが居心地のよい学校と感じる重要な3つの要素

1. 安心できる居場所の確保 ⇒ 不安や孤独感を軽減 心理的な安定
2. 信頼できる大人の存在 ⇒ 自己肯定感の回復
3. 自分らしさを活かす選択と行動 ⇒ 自分のこととして考え、物事に向き合う意欲の醸成

◆草潤中学校の学び⇒自分らしい未来を拓くあゆみ

- ・生徒一人ひとりの歩幅を大切に「好き」を出発点とする学びの充実
- ・「好き」を見つけ、「好き」を楽しみ、「好き」でつながり、「好き」を拡げる。

※草潤中学校「伴奏型支援」

- 生徒本人のリズムを大切にしながら奏でる主旋律に耳をすませ、必要に応じて音を添えながら寄り添う支援

※草潤中学校「協奏型支援」

- 伴奏によって育まれた安心感と自分らしさを土台に、それぞれのリズムや旋律を奏でることを大切にしながら、仲間と自然に関わり合い、互いのよさが響き合うように支える支援

◆経営の重点

- ・一人ひとりのあゆみの歩幅を尊重する安心の土台づくり
- ・一人ひとりの「強み」に着目するストレングスアプローチによる支援
- ・一人ひとりに学びを届け、見とるためのひらかれた対話
- ・一人ひとりの願いや夢につながる人・もの・こととの豊かな出会いづくり

◆開校の経緯：多様性と跡地利用の融合

- 不登校特例校の設置：岐阜市は最初から不登校特例校の設置を目指していたわけではなく、統合した学校の跡地（元々小学校があった場所）をどう利用するかという議論からスタート。
- 検討の背景：2016年の教育機会確保法公布により、不登校特例校の検討が開始。当時、岐阜市の不登校児童・生徒数は全国や岐阜県と比較しても多いという課題があった。
- 統合：「ニーズ」と「跡地利用」という2つの側面が重なり合ってきた。

◆学校概要と多様な役割

- 生徒数：53名
- 主な役割・特徴：
 - 夜間通級指導教室：夕方5時から8時まで指導を実施（昼間と合わせると市内の生徒38名を指導）。
 - 草潤サポート：市内で不登校状態にある生徒が自由に利用できるフリースペースを全中学校に設置（現在50名登録）。
 - オンラインフリースペース事業：不登校でなかなか外に出られない生徒に向けた、メタバース環境での学びの支援（市担当者と同校職員で実施）。

◆同校の特徴：時間・空間の柔軟性

- 一斉の廃止と個別選択：一般的な学校で見られる制服やカバン、持ち物の指定、給食や清掃の一斉実施などをなくし、自分の望む場所で過ごすことを認めている。
- 教育課程（授業時数）：標準時数1015時間に対し、本校は771時間。総合、道徳、特別活動をまとめて「ウォーミングアップ」、「クールダウン」の時間として設定。
- 保健体育：基本はそのままだが、5教科については1時間ずつマイナスして実施。
- セルフデザイン：音楽、美術、技術家庭を合わせて各学年週2時間「セルフデザイン」という時間を設け、前半は基礎的な内容、後半の20時間では生徒自身が学ぶ内容を選択して集中できる仕組みにしている。
- 日課：授業は遅めの10時半開始。午前2時間、午後2時間、1日4時間の授業で構成。

- 定期テスト：年2回あるが、受けるかどうかは本人の自己決定・希望による。
- 通知表：観点別評価と評定をつける従来タイプに加え、学習状況を所見として伝えるものや、その両方を合わせたものなど3パターンの通知表を用意し、自己選択している。

○質疑応答

- Q 草潤中学校をはじめ、岐阜市内には様々な不登校生徒の居場所があるとのことだったが、不登校児童生徒の数について。
- A 令和6年度1185人、令和7年度1193人で高止まりではあるが、横ばいで推移。
- Q 教職員の方々は、希望者なのか通常の異動で配置になるのか。
- A 希望者もいるが、研修などを通じ、草潤から要請することもある。
- Q 学校らしくない学校を目指すなかで、先生方の今までの学校感からなかなか抜け出せないことがあるが、草潤ではどうか。
- A まさに、同じ課題がある。ある学会で「学びの多様化学校の一斉協同化」が課題になっているが、子どもたちの安心感は一人一人によって違い、自分が思っていることも決して正しい答えではないということを校長はじめ教職員が前提として持っているべきと、教職員間での対話も重要視し、心がけている。

○所見など

不登校特例校から学びの多様化学校の先駆けとして、試行錯誤しながらも6年目を迎えた草潤中学校を視察できたことは、本市の不登校支援をさらに発展させる上で、多くの学びを得ることができた。

最も感銘を受けたのは、子どもたちの安心できる居場所が校内の至るところにあり、子どもたちの安心の土台が学校全体にあふれていることであつた。

また、生徒が50人いれば50通りの支援があるというように、教職員が「伴奏型支援」、「協奏型支援」の理念のもと、生徒それぞれの歩幅や「好き」を出発点として寄り添う姿に、真の教育のあり方を見た思いである。

校内の至るところに居場所があり、信頼できる大人との対話が日常的に行われている環境こそが、子どもの自己肯定感を育み、主体性を引き出す源ではないかと確信した。

本市においても、先進的な不登校支援が実施されており、草潤中学校の教育活動の一部には、本市の既存の取組と共通する部分や引けを取らない実践も見受けられた。しかし、それらは裏を返せば、少しでも動くことができる子どもたちに対する支援に留まってお

り、まだ一步を踏み出せないでいる子どもたちや、社会とのつながりを見出せずにいる児童・生徒へのアプローチ、あるいは日々の対応に苦慮する現場の教職員の負担軽減という点においては、依然として大きな課題が残されている。

今回の視察で得た、草潤中学校における「ストレングスアプローチ」、「対話」、「時間・空間の柔軟性」といった先進的な実践事例は、本市の不登校支援のさらなる充実に向け、極めて有益な学びを与えてくれた。ここで得た知見を、本市における切れ目のない不登校支援体制の構築と、誰もが取り残されない学びの環境づくりに向け提案していきたい。